

*Absalom, Absalom!*におけるFaulknerの語りの技法 (IX)

Faulkner's Narrative Technique in *Absalom, Absalom!* (IX)

重 迫 和 美

Kazumi SHIGESAKO

Faulkner's *Absalom, Absalom!* establishes an unusual relationship between its readers and Quentin Compson, one of the main characters in the novel. At first the readers identify themselves with Quentin as if they were his companion detectives who try to solve the murder case of Charles Bon, but in the end, relativizing Quentin's point of view, they come to appreciate the drama in which the Sutpens' and the narrators' (including Quentin's) dramas are enacted simultaneously. This unique reading experience is, in my opinion, caused by Faulkner's distinctive narrative technique. In order to clarify the technique, I have examined Chapters 1 through 8 of the novel in my previous papers.

This paper examines Chapter 9, the last chapter of the novel, in which two episodes in 1909—Quentin's visit to the Sutpen House and its burning down—are told. Although the Sutpens' secret regarding Bon's parentage has been disclosed in Chapter 8, the episodes are still important for the readers, as they help to make clear how Quentin got the information about Bon.

What kind of relationship is established between the readers and Quentin in this final chapter? How far are the psychological and narrative structural distances between them? How much information is given to them? The answers to these questions give us the key to understanding the significance of Chapter 9 and also help us appreciate Faulkner's innovative narrative technique in *Absalom, Absalom!*.

序

Absalom, Absalom! (以下*Absalom*) が読者に与える特異な読書体験は読者が①Quentinと共にSutpen家の謎解きに加わるが、②次第にQuentinと異なる見方をとるようになり、③Quentinを*Absalom*に登場する一登場人物として相対化する視点に立つようになる、ことによって起こっている。これらの複雑な効果は私の考えではFaulkner独自の語りの技法によって実現している。この技法を明らかにするため、これまで第1章から第8章までを検討してきたので、本論では第9章を取り上げたい。

Ex narratorのvoiceで始まる第9章の語りの現在は第8章の継続で1910年1月、場所はHarvard大学のQuentinとShreveの部屋である。1909年9月にQuentinがRosaとSutpen屋敷を訪問した時のエピソード、その3ヶ月後にSutpen屋敷が炎上したエピソードが第9章には織り込まれている。Bonが混血のSutpenの長子であったというSutpen家の秘密は既に第8章までにQuentinとShreveによって明かされているものの、本章で語られるエピソードは、どのようにしてQuentinがその秘密を知ったのかに言及する重要な意味を持つ。本論では*Absalom*最終章となる第9章における、読者とQuentinとの心理

的距離、読者に与えられる情報と読者とQuentinとの情報差、読者とQuentinとの物語構造上の距離を検討した上で、作品全体に対する第9章の意味を考察し、最後に*Absalom*におけるFaulknerの語りの工夫を総括する。

1 イタリック体の用法

第8章まででQuentinと読者の心理的距離が小さくなるのは、Ex narratorのfocal characterがQuentinに特化されていることと、登場人物の内面を描くイタリック体がQuentinに対して使われていること、の2つの工夫によってであることが明らかになった。¹ 前章までと同様、第9章の物語言説にはEx narratorのvoiceがQuentin以外のperspectiveから語る部分はない。では、イタリック体の使用はどうか。²

第9章の5箇所のイタリック体の用法は、次の4種に分類することができる。小説の最後でShreveに南部への意見を聞かれたQuentinの反応は、“I dont hate it,” Quentin said, quickly, at once, immediately; “I dont hate it,” he said. *I dont hate it* he thought, panting in the cold air, the iron New England dark: *I dont. I dont! I dont hate it! I dont hate it!*” (303)³ と描かれている。引用のイタリック体部分は、“he thought”の内容、すなわちQuentinの思考を写していることから、「Quentinの内的意識の声を写す用法」である。ShreveがRosaを“Aunt Rosa”と呼んだ時のQuentinの反応をEx narratorが、“Quentin did not answer; he did not even say, *Miss Rosa.*” (301)と描写する際に表れるイタリック体もこれと同じ用法と考えられる。文の主語がQuentinであることからイタリック体部分がQuentinの声として設定されているのは明らかであり、このセリフは実際には発話されていないのでQuentinの内的意識の声と考えるのが妥当であろう。

2つ目は、1909年9月、Sutpen屋敷でHenryと出会い、帰宅した時のQuentinの回想場面に表れるイタリック体である。

And you are—?
Henry Sutpen.
And you have been here—?
Four years.
And you came home—?
To die. Yes.
To die?
Yes. To die.
And you have been here—?
Four years.
And you are—?
Henry Sutpen. (298)

この引用の直前に位置する標準体部分では、帰宅したQuentinがその日のSutpen屋敷来訪のことを回想している様子がEx narratorによって描かれており、このイタリック体部分がQuentinの記憶をもとに彼の内面で再現された言説として設定されている。⁴ この物語状況は、Quentinが物語生産者である第2次物語世界が彼の回想であることと、その物語世界にQuentin自身が登場してくることから、このイタリック体の用法は「Quentinが生産者となる第2次物語の登場人物（Quentin自身も含む）のセ

リフがQuentinの内面で描出される用法」と定義できる。

Mr. Compsonからの手紙の文字がイタリック体で記されている部分は、「他の登場人物の声がQuentinの知覚のフィルターを通して伝えられるもの」に分類できる。

he [Quentin] would be able to decipher the words soon, in a moment; even almost now, now, now. . . . Now he (Quentin) could read it, could finish it — the sloped whimsical ironic hand out of Mississippi attenuated, into the iron now:

— or perhaps there is. Surely it can harm no one to believe that perhaps she has escaped not at all the privilege of being outraged and amazed and of not forgiving but on the contrary has herself gained that place or bourne where the objects of the outrage and of the commiseration also are no longer ghosts but are actual people to be actual recipients of the hatred and the pity. (301-02)

ここでQuentinは第6章で既に言及されているMr. Compsonからの手紙を目の前においている。そこに書かれた言葉はしばらくの間解読されない暗号のごとく彼の目の前に意味を持たないものとしておかれていたのだが、この場面ではようやくその暗号がQuentinに言葉として認識されていく様子が描かれている。Quentinにとって意味を持つようになった手紙の言葉はイタリック体で伝えられる。ダッシュ記号が示しているのは、父の手紙の続きをQuentinが読んでいるという状況であり、彼が認識していない言葉は記されていないことが分かる。

4種目のイタリック体は、QuentinがRosaとSutpen屋敷に向かう道中の描写に表れる。

But Quentin was already aware of that. . . it seemed to him that if he stopped the buggy and listened, he might even hear the galloping hooves; might even see at any moment now the black stallion and the rider rush across the road . . . — the rider who at one time owned, lock stock and barrel, everything he could see from a given point. . . ; who went to war to protect it and lost the war and returned home to find that he had lost more than the war even, though not absolutely all; who said *At least I have life left*. . . Maybe he would even stop at the cabin and ask for water and she [Rosa] would take the bucket and walk the mile and back to the spring to fetch it fresh and cool for him, no more thinking of saying “The bucket is empty” to him. . . (290-91)

“Quentin was already aware of that, it seemed to him”に表れているように引用の前半はExternal narratorがQuentinのperspectiveから語っている。“— the rider”以降の部分のSutpenの描写はEx narratorがQuentinのperspectiveによらずに語っているため、後半部分にある標準体のEx narratorのvoiceと峻別されたイタリック体部分“*At least I have life left.*”はSutpenの発声されたセリフか、内面の声であると考えていだろう。また、引用の最終行でSutpenと同一水準の物語世界登場人物Rosaのセリフが2重引用符で囲まれていることから考えると、このイタリック体は「Sutpenの内面描写」に充てられていると言えよう。⁵

以上の結果から、第9章でのイタリック体はSutpenの内的意識の声を写したごく短い部分以外はQuentinの内的意識を写したものと考えられる。⁶ 第9章においても、第8章までと同じように、Ex narratorによるQuentinのperspectiveの利用と、Quentinの内面を写すイタリック体の多用により、読者とQuentinとの心理的距離は小さくなっていると言える。

2. 読者とQuentinとの情報差

Bonが混血でSutpenの長男であるという、Sutpen家の秘密を読者に明かす第8章の物語言説には、読者にその情報を信用させるような語りの工夫がなされていることを私は前稿で指摘した。⁷ しかしながら、その情報が明かされる場面はQuentinとShreveの共同想像であるという設定を考えると、その情報の信憑性に異議が唱えられてきたのも無理はない。⁸ 彼らの結論を読者が信用できるかどうかは、Quentinがどうやってその情報を手に入れたのか、その経緯、情報源の信頼度に関わっており、第9章にはその秘密をQuentinが知る機会となった、Henryとの対面という重要な場面が描かれている。⁹

QuentinがSutpen家の秘密を知ったのは、RosaとSutpen屋敷を訪れた時であることが第8章までに繰り返し言及されてきた。どのようにその言及がなされていたかをここで確認しておこう。第6章でQuentinはShreveが語るSutpen物語を聞きながら、1909年9月の夕暮れ時を思い出し、父Mr. CompsonとShreveの語りを重ね合わせて“*if Father had known as much about it the night before I went out there as he did the day after I came back. . .*” (148)と考える。直前の第5章でRosaがQuentinに““Something living in it. Hidden in it. It has been out there for four years, living hidden in that house.”” (140)と語っていることから、読者には“there”がSutpen屋敷であり、“the night before I went out”, が彼らがSutpen屋敷を訪問した1909年9月のある日の夜であることがわかる。一方、Sutpen屋敷訪問によって何が明らかになったのか、“it”が何を指しているのかは、この部分からだけでははっきりしない。

その内容が示唆されるのは、続く第7章のQuentinとShreveの対話においてである。Sutpen物語を語る中で、QuentinはShreveに、Sutpenが自分の息子にBonという名前をつけたのだと父Mr. Compsonが語っていた、と言う。それに対してShreveはすかさず、もしMr. CompsonがBonとJudithが兄妹だということを知っていたのなら、なぜMr. CompsonはBonとHenryとの間の問題はBonが結婚した混血娘にあったと言ったのだろう、とQuentinに問いかける。Quentinは自分が父に情報を与えたのだと述べた後、““The day after we — after that night when we —””と言いよどみ、Shreveが““After you and the old aunt. I see. Go on. And Father said —”” (214)、と補足する。このやりとりから、Sutpen屋敷を訪問した際、Quentinは少なくともBonがSutpenの息子であるという情報を手に入れ、帰宅後父にそれを語ったと考えることが出来る。そのように考えると、Bonに混血の妻がいたためにHenryが彼を殺害したと推測している第6章までのMr. Compsonが描かれている時間は、第7章でBonとJudithとの間に近親相姦の問題があったのだという認識があるMr. Compsonが描かれている時間より早い時期なので、つじつまが合うことになる。

では、QuentinはSutpen屋敷でどのようにその情報を手に入れたのか、また、それは第8章のQuentinとShreveの結論を読者に納得させるような裏付けとなり得ているのか、第9章を検討してみよう。Sutpen屋敷の2階にQuentinより一足先に上っていたRosaは、階段を下りてくる時にQuentinとすれ違う。その彼女の様子は以下のようにEx narratorによって描写されている。

she stumbled a little and caught herself and looked full at him as if she had never seen him before — the eyes wide and unseeing like a sleepwalker’s, the face which had always been tallow-hued now possessing some still profounder, some almost unbearable, quality of bloodlessness — and he thought, ‘What? What is it now? It’s not shock. And it never has been fear. Can it be triumph?’ (296)

ここではっきりとわかるのはQuentinを識別できないほどに彼女が茫然自失している様だけである。

彼女が2階で誰と会ったのか、どんなやりとりがなされたのかについては全く記されていない。その相手についてはわずかに、彼女が感じているのが“shock”や“fear”でなく、“triumph”かもしれないというQuentinの推測がその人物像を暗示しているだけだ。彼女のSutpen屋敷訪問の目的が、屋敷に住み着いたよそ者を見極めて対処することだったことを考えると、彼女が会った相手は彼女の主張に抵抗したり彼女を脅したりはしないで、彼女の求めに応じる態度を示したと考えられるのだ。しかし、その後後に2階に上がったQuentinは、階段を下りる時に、“Maybe my face looks like hers did, but it's not triumph” (296)と考え、Rosaが相手を打ち負かしたという前言を撤回している。実際にはその相手はHenryだったので、Rosaが“triumph”を感じられないのは当然だ。そのことをQuentinはHenryを2階で発見することにより気付いているのだが、この時点でもQuentinが誰に会ったのかは言及されないで、読者にはQuentinがなぜそのように考えるのかがはっきりしない。

彼らが2階で誰に会ったのかは、Rosaと別れて自宅に帰った後Quentinが回想する中で初めて読者に示される。

he [Quentin] was not afraid, because what he had seen out there could not harm him, yet he ran; . . . he said 'I have been asleep' it was all the same, there was no difference: waking or sleeping he walked down that upper hall . . . ; waking or sleeping it was the same: the bed, the yellow sheets and pillow, the wasted yellow face with closed, almost transparent eyelids on the pillow, the wasted hands crossed on the breast as if he were already a corpse; waking or sleeping it was the same and would be the same forever as long as he lived:

And you are—?

Henry Sutpen.

And you have been here—?

Four years.

And you came home—?

To die. Yes.

To die?

Yes. To die.

And you have been here—?

Four years.

And you are—?

Henry Sutpen. (297-98)

引用の冒頭はEx narratorの語りで始まり、Quentinがかなりの衝撃を受け、自分が目撃したことが夢かもしれないとさえ考えていることがわかる。イタリック体の回想部分でようやく、読者はQuentinとRosaがHenryと対面したことを知らされる。作品内に現れるQuentinとHenryの交わした言葉はここに挙げたものだけである。QuentinがHenryと遭遇することでSutpen家の秘密をかぎ当てたと考えられるにも拘わらず、この短い対話には、Bonの素性に触れる情報は何も含まれていない。Quentinの回想はここで終わっており、読者にはQuentinがどのようにしてSutpen家の秘密を知ったのかわからないままである。

結局、この中途半端な種明かしを読者はとりあえず信用し、とりあえず満足するしかない。なぜなら、非常に短く均整のとれすぎたこのQuentinとHenryの対話を含む1909年9月のエピソードの描写を、信頼できるものとして受け入れるように最も権威のあるEx narratorが強要しているからである。Ex

narratorは第9章の随所でQuentinの優れた再現能力に言及している。例えば、Quentinの回想が始まる290頁で、Ex narratorは、“Even now, with the chill pure weight of the snow-breathed New England air on his face, he could taste and feel the dust of that breathless (rather, furnace-breathed) Mississippi September night.”と語って、助動詞“could”を使って断言することでQuentinの回想する物語の権威を保証している。引用のイタリック体部分の直前においても、QuentinがSutpen屋敷での経験を“I have been asleep”と考えて現実かどうか確信が持てていないのに対し、Ex narratorは“waking or sleeping it was the same “と述べ、とにかくも“he walked down that upper hall”だと、彼が実際に行動したのだということ、つまり、ここで語られていることが夢物語ではなくて実際に起こったことだということを保証している。Quentinが参加していないSutpen屋敷炎上エピソードの描写でさえも” Quentin could see” (300)を繰り返す。Ex narratorはこのように第9章において奇妙なことに、自らに与えられた信頼性を利用して、語りの権威をQuentinに譲り渡し、物語全体に対する責任を物語内登場人物Quentinに負わせているのである。

しかし、Ex narratorから語りの権威を譲り受け、読者の信頼を獲得する筈のQuentinは、自分が得た情報を読者に明かそうせず、読者の信頼に応えない。第9章では、このように、QuentinとHenryとの決定的なやりとりが隠蔽されることによって、Quentinと読者との間に情報差と同時に心理的距離が生まれていると言える。¹¹

3 読者とQuentinとの物語構造上の距離

第9章において、読者とQuentinとの物語構造上の距離はどうなっているのか。第9章の物語構造のパターンを確定しながら、それぞれにおける読者とQuentinとの距離を検討していく。第9章冒頭は以下のように始まる。

At first, in bed in the dark, it seemed colder than ever, as if there had been some puny quality of faint heat in the single light bulb before Shreve turned it off and that now the iron and impregnable dark had become one with the iron and icelike bedclothing lying upon the flesh slacked and thin-clad for sleeping. . . . “University of Mississippi,” Shreve’s voice said in the darkness to Quentin’s right. (288)

寝る支度をするShreveの様子や、深まってくる闇、強まる冷気の描写がEx narratorのvoiceで行われる。1910年1月、Harvard大学を舞台とし、Quentin、Shreveが登場する第1次物語世界が構成される(物語構造A)。

290頁4行目 (“He [Quentin] could taste the dust.”)から場面転換が起こり、1909年9月にQuentinがSutpen屋敷を訪問したエピソードの描写が始まる。場面転換自体はQuentinの回想をきっかけに起こるが一旦過去の描写が始まるとその描写はQuentinが回想する第2次物語世界としてではなく、Ex narratorによる第1次物語世界として語られるので、物語構造はAと同じタイプとなる。

“No,” Quentin said peacefully. He could taste the dust. Even now, with the chill pure weight of the snow-breathed New England air on his face, he could taste and feel the dust of that breathless (rather, furnace-breathed) Mississippi September night. . . . Now she [Rosa] spoke, for the first time since they had left Jefferson, since she had climbed into the buggy. . . . “Now,” she said. (290)

引用の冒頭ではEx narratorがQuentinのperspectiveから“he could taste and feel the dust”と語り、彼

が1909年9月の出来事を思い返す様を描いている。Quentinの回想によって過去のエピソードが織り込まれる設定になっているが、過去の情景はQuentinの意識内で再現される様式を取っておらず、回想する主体としてのQuentinの姿は潜在化している。その結果、この場面はQuentinの回想としての性質を奪われ、QuentinがEx narratorによる第1次物語世界の登場人物の役割を果たすことになる。Rosaのセリフが2重の引用符で括られていることから、彼女と同一水準に置かれているQuentinが第1次物語世界の登場人物となっていることが確認できる。このタイプAでは、物語構造図Aが示すように、読者はEx narratorによって描かれる語り手でも聞き手でもない物語内登場人物としてのQuentinに接することとなり、両者の物語構造上の距離は大きくなっている。

物語構造上重要な変化は、1909年9月Sutpen屋敷訪問の夜のエピソードが、帰宅後のQuentinの回想として語られる部分の後半イタリック体に現れる。違いを明らかにするため、構造が変化する直前標準体部分と比較しながら慎重に検討しよう。以下引用の標準体部分では、自宅に帰ってもなおSutpen屋敷での出来事による衝撃が冷めずに取り乱しているQuentinの様子がEx narratorのvoiceで描かれている。

he [Quentin] was not afraid, because what he had seen out there could not harm him. . . 'I ought to bathe,' he thought: then he was lying on the bed, naked, swabbing his body steadily with the discarded shirt, sweating still, panting. . . he said, 'I have been asleep' it was all the same, there was no difference. . . (297-98)

この引用部分は先の290頁から連続した場面であり、Ex narratorによって第1次物語世界内登場人物としての1909年時点のQuentinの存在が顕在化したタイプAの物語構造を持つ。この描写は以下のよう続く。

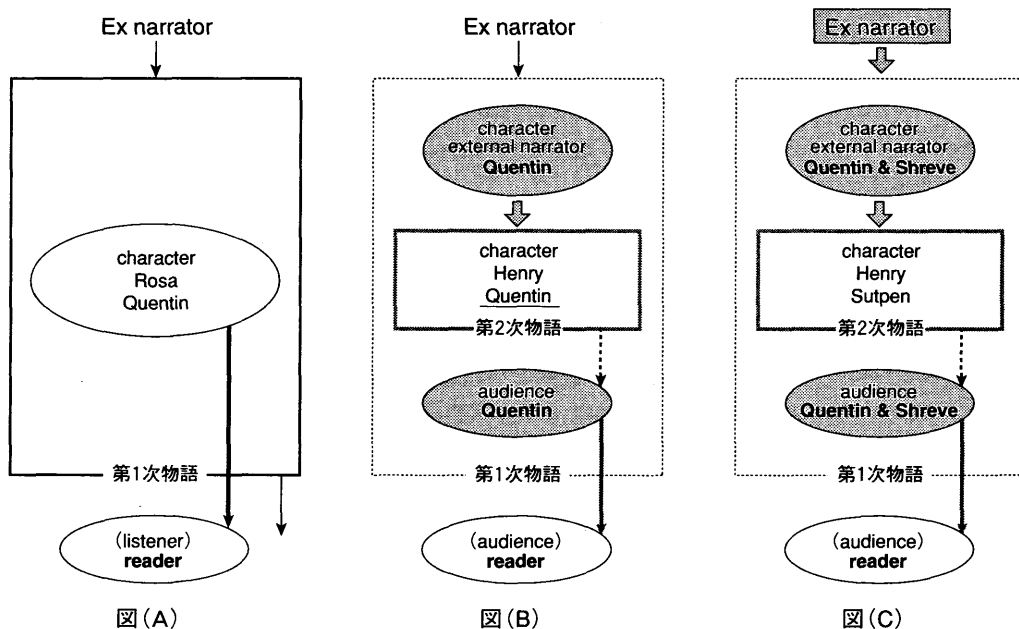
waking or sleeping he walked down that upper hall between the scaling walls and beneath the cracked ceiling, toward the faint light. . . saying 'No. No.' and then 'Only I must. I have to' and went in, entered the bare stale room whose shutters were closed too, where a second lamp burned dimly on a crude table; waking or sleeping it was the same: the bed, the yellow sheets and pillow, the wasted yellow face with closed, almost transparent eyelids on the pillow, the wasted hands crossed on the breast as if he were already a corpse; waking or sleeping it was the same and would be the same forever as long as he lived: (298)

ここでは1909年時点のQuentinの回想により時間が逆行して、数時間前のSutpen屋敷訪問のエピソードへと場面転換が起こっている。この場面転換は物語構造に変化をもたらさない。なぜなら、290頁4行目の場面転換が物語構造を変えないのと同様に、帰宅時点のQuentinがSutpen屋敷訪問時の自分自身のことを回想し始めると、その場面転換の瞬間から回想する主体としての帰宅時点Quentinは姿を消し、Ex narratorがSutpen屋敷訪問時Quentinを第1次物語世界内登場人物として描き始めるからである。Quentinの思考が、場面転換の前後両方において一重の引用符という同一の記号によって括られていることから、回想する主体としての帰宅時点Quentinと回想されるSutpen屋敷訪問時Quentinとがそれぞれ、物語構造上同じ水準—第1次物語世界—の登場人物として設定されていることがわかるだろう。この引用の直後に、Aタイプとは異なった物語構造を持つイタリック体部分が出現することになる。

And you are—?
 Henry Sutpen.
 And you have been here—?
 Four years.
 And you came home—?
 To die. Yes.
 To die?
 Yes. To die.
 And you have been here—?
 Four years.
 And you are—?
 Henry Sutpen. (298)

イタリック体の部分は、既に検討したようにQuentinの記憶をもとに彼の内面で再現された言説であり、Quentinの回想が生産する第2次物語世界内で自分の声を与えられた登場人物達のセリフがQuentinの知覚のフィルターをとおして伝えられている。HenryとQuentinの対話は直接話法によって描出されるため、彼らのvoiceは読者に直接伝えられるかのようだ。その回想世界を見ている観客としてのQuentinの痕跡がイタリック体という書体によって刻まれてはいるものの、その物語世界を回想している主体としてのQuentinの姿は表に現れない。その結果、HenryとQuentinのやりとりはあたかもEx narratorによって支えられている第1次物語世界内で行われているかのように見えてしまうのだ。

第8章で読者とQuentinとの物語構造上の距離を論じた際、BonがHenryに自分の素性を明かす場面のイタリック体部分において、読者とQuentinとの距離は小さくなることを指摘した。しかし、第9章の問題のイタリック体部分、物語構造B (図B) は、第8章のイタリック体の物語構造C (図C)



とは決定的に異なる点がある。双方の物語構造とも、読者にとって最も顕在的なのは第2次物語世界であり、顕在的なvoiceは第2次物語の登場人物のセリフである。第8章で読者は第2次物語世界の登場人物BonとHenryの生の声のやりとりを見ている位置におかれていた。それと同様に、第9章においても、読者は第2次物語世界の登場人物のやりとりを観劇する。第8章と異なるのはその登場人物の役割をQuentinが果たしているということだ。このことは、読者とQuentinとの物語構造上の距離を左右する決定的な相違点となる。第9章においてQuentinは、これまで彼が主に担ってきたような「第2次物語世界の語り手」、「第2次物語世界の聞き手」という役割ではなく、「第2次物語世界の登場人物」という役割を果たすことになり、第2次物語世界の枠が読者とQuentinとを隔てる結果、両者の物語構造上の距離は大きくなっていくのだ。

イタリック体が終わると再び物語構造はタイプAに変化する。やがてShreveが第2次物語世界としての1909年9月のエピソードを語り始め、Quentinが聞き手となる物語構造に変化するが、その状態は14行分しか続かない。299頁24行目からは1909年12月に起こったSutpen屋敷炎上のエピソードをQuentinが思い描く様が描写される。この部分はQuentinの想像なのだが、彼のvoice（内的意識の声）ではなく、Ex narratorのvoiceで語られている。その結果、Quentinの知覚のフィルターをとおして登場人物達の声が読者に届くCタイプよりも、むしろQuentinが語り手でも聞き手でもないAタイプの構造に似てくることになる。むしろ、正確に言えば、Sutpen屋敷炎上のエピソードにはQuentinが物語内登場人物として出てこないという点で、Aタイプとは異なっている。しかし、炎上場面を描写する際にEx narratorが“Quentin could see”を繰り返してQuentinを現場の目撃者に仕立て上げているせいで、彼の物語内登場人物としての姿が印象づけられることになり、結局読者とQuentinとの物語構造上の距離はタイプAとほぼ同じになる。301頁8行目からは場面は1910年1月に戻り、最終頁の303頁までタイプAの物語構造が続く。

このように、第9章においては前章までとは違って物語言説の大部分において、Quentinは物語内登場人物としての姿を読者にさらすことになる。その結果、両者の物語構造上の距離は安定して大きくなっていると言えるのだ。

4 最終章としての第9章の意義

結局最終章においても、QuentinがどのようにしてBonの素性を知り得たのかは明らかにされない。第8章でQuentinとShreveが到達した結論が信頼できるのかどうか、曖昧なままで作品は結末を迎える。Sutpen家について第9章で新たに暴かれる秘密はなく、逆に読者はQuentinの情報隠蔽によって失望感を味わい、当惑することになる。この作品が単にBon殺害事件を究明するための物語であるならば、事件について何ら新しい情報をもたらさないこの第9章は不要であるとさえ言えるかもしれない。それでは、この第9章がAbsalomという作品の最後に置かれているのはなぜなのか。本章の作品全体に対する意味を考えることで、これまでの一連の論考の締めくくりとしたい。

第9章の物語構造にも表れているように、この最終章は、QuentinがSutpen家の謎を解くための行動を起こす唯一の場所である。そして彼の行動が物語にSutpen屋敷炎上という劇的な展開をもたらすきっかけを作ることになる。そのきっかけとなったのは、もちろん、死んだと思われていたHenryが生きていたというQuentinの発見だ。第8章までに一応Sutpen家の秘密を知らされている読者に対して第9章が与えられているのは、この新たな発見を読者に示すためとも言えるかもしれない。

よく考えると、QuentinのHenry発見は実際には語りの現在1910年1月からおよそ5ヶ月遡った時に起きた出来事であり、第6章以降のQuentinは既に知っているはずである。にもかかわらず、Henry生存の情報は第9章のQuentinとHenryの対話が表示されるまでは読者に対して巧みに伏せられて

いる。その瞬間が来るまで、Henryは死んでいると読者に思わせるようなトリックが仕掛けられているのだ。

第1に、Rosa自身がそこにHenryが居るとは思っていないように描かれている。彼女は斧を持って出かけ、Sutpen屋敷に近づいてきた時、“We are on the Domain. On his [Sutpen’s] land, his and Ellen’s and Ellen’s descendants. They have taken it away from them since, I understand. But it still belongs to him, to Ellen and her descendants.” (290) と言っているし、ドアを斧で壊せとQuentinに命じた時には“‘It belonged to Ellen. I am her sister, her only living heir.’” (294) と続けている。もともと彼女がSutpen屋敷に行く決心をしたのは、死期が近づいてくるのを意識し始めた彼女が一念発起して、4年前からそこに潜んでいる何者かの正体を突き止めようと決意したためだった。Sutpen屋敷が“Ellen and her descendants” の物であると繰り返し語り、自分と血を分けた姉Ellenとその子孫達以外にSutpen屋敷に侵入することを許さないとする南部貴婦人らしい断固とした彼女の様子には、そこに隠れている何者かがSutpen家以外の者であることに対する憤りが表れており、それが他ならぬHenryであるという予想は全く感じられない。また、自分はEllenの“only living heir”であるという彼女の言葉にもHenryが未だ生きているという認識は全くない。

第2のトリックは、HenryがSutpen屋敷に帰ってきているとは夢にも思っていないQuentinの様子が描かれていることだ。彼は屋敷を目前にしてたじろぐRosaを見ながら、自分たちはSutpen屋敷に夜侵入するという危険を冒さず、家に帰った方がいいと考える。ちょうどHenryがBonを射殺したとされる門を見た時の彼の気持ちは、“wishing that Henry were there now to stop Miss Coldfield and turn them back, telling himself that if Henry were there now, there would be no shot to be heard by anyone.” (291) と描写されている。ここで使われている仮定法は、QuentinがHenryの存在に全く気付きもしていないことをはっきり表している。

第3のトリックはSutpen家訪問のエピソードの語り方である。その訪問でQuentinとRosaはHenryに会うのだが、小説の中で初めてそのエピソードが語られる時には二人が驚きのあまり、口もきけなくなっている様子が描かれるだけで、Henryに会ったことは一切語られない。すなわち、QuentinとHenryの対面の場面は、その瞬間が読者にとっても驚きになり得るように入念に準備されている。このようなトリックを仕掛けてまで、情報開示を先延ばしにし、QuentinのHenry発見の瞬間を読者に共有させようとする意図はどこにあるのだろうか。Sutpen家の謎に関する新情報を一切もたらすことのないこの瞬間に一体どのような重要性があるというのか。

イタリック体で描かれたこの瞬間が、何かしら重要な意味を帯びていることは、既に述べたようにこの部分が特異な物語構造をしている点にも示されているように思える。この物語構造が作品中際だって特異なのは、読者とQuentinとのではなくて、実はQuentinとSutpen物語との関係が特殊だからである。それまでSutpen物語世界の聞き手/語り手としてその物語の傍観者であったQuentinは、この瞬間においてSutpen物語世界内の行動する登場人物として主要登場人物の一人Henry Sutpenと向かい合い、物語世界内に取り込まれていく。第1次・第2次という物語世界の水準は揺らぎ、過去と現在が抵触するこの瞬間は、Quentinにとってまさにエピファニー的瞬間である。作品に記録された以外にHenryが何を語ったのかという疑問はもはや意味を持たない。おそらく、Quentinには、作品内に描かれたわずかな言葉で十分だったに違いないのだ。この瞬間、彼にとってSutpen物語の客観的真相は問題ではなくなる。語り手達の言葉によって織られてきた過去の物語を、自己の問題としてとらえ直すこと。このことこそが今やQuentinが直面している問題なのだ。

読者をQuentinのこの認識の瞬間に立ち会わせることこそ、最終章としての第9章の意義である。この様に考えて初めて、最後に繰り返されるQuentinの言葉の意味が分かってくるのだ。“I dont hate it [the South].” (301) という心情告白は「好きである」と同義ではない。自分の故郷の外部に身を置

きながらも、Quentinは生まれ育った共同体の恥部を、Shreveのように外部からエンターテイメントとして楽しむことはできない。また、自分の両親が誰であるかさえ問題としないSutpen家の末裔Jim Bond-ClytieとHenryを巻き込んで崩壊していったSutpen屋敷の唯一の継承者でありながら怒号だけを残して去っていった彼、そして恐らくはShreveが言うようにやがては世界中に子孫を増殖させていくであろう彼—とは対照的に、Quentinは自分が偶然によって生まれ落ちた共同体Jeffersonにかつて生きた人々の亡霊然とした声のこだまにからめとられながら、結局はそこから抜け出すことが出来ず自らも亡霊にならざるを得ないことを認識する。彼は故郷を良き場所として積極的に肯定することが出来ないが、同時にそこを悪しき場所として捨て去ることも出来ないのだ。共同体と個人の、こののっぴきならない関係を表した、*Absalom*最終行のQuentinの言葉は、以後Faulknerが深化発展させながら終生取り組むことになる重要なテーマへの導入となっていくのである。

結

私は本稿を含めた9本の論文で*Absalom*におけるFaulknerの語りの技法を章毎に詳細に分析し、読者とQuentinとの間の関係を定める要素を以下のように確定してきた。

- ・読者とQuentinとの心理的距離は、物語言説がQuentinの内面を描いているかどうか、すなわち、Ex narratorがQuentinをfocal characterとしているかどうか、及びイタリック体でQuentinの内的意識の声が描かれているかどうか、で調整される。
- ・読者とQuentinとの心理的距離は、物語言説が読者に与える情報の操作、すなわち、読者にSutpen家の秘密に関する情報を与える物語言説を誰のperspectiveから語らせるか、によって変化する。perspectiveの所有者として「最も信頼できるExternal narrator」、「Quentinより情報の質・量が劣る他の登場人物」、「Quentin」の3種を区別することができる。
- ・物語構造上の読者とQuentinの関係は第1次物語世界内登場人物であるQuentinが第2次物語世界に対してどのような役割を担うかで変化する。その役割には、「役割0の場合（第2次物語世界が生産されない場合）」、「Quentinが第2次物語世界内登場人物の役割を持つ場合」、「第2次物語世界に対してQuentinが『語り手』の役割を持つ場合」、「第2次物語世界に対してQuentinが『聞き手』の役割を持つ場合」、「第2次物語世界に対してQuentinが『語り手（物語生産者）』兼『聞き手（観客）』の役割を持つ場合」がある。
- ・物語構造上の読者とQuentinの関係は、物語言説のvoiceの発信者が誰かによっても変化する。「Ex narratorの場合」、「Quentinの場合」、「Quentin以外の第1次物語世界内登場人物の場合」、「第2次物語世界内登場人物の場合」を考えることができる。さらに、それらのvoiceがQuentinの知覚のフィルターを通してかどうかを条件として考慮しなければならない。

これらの要素が絡み合いながら、*Absalom*では読者とQuentinとの関係が変化していくことになる。作品中、Ex narratorがQuentinをfocal characterとして特化しており、イタリック体で内的意識の声が描かれるのもほとんどがQuentinであることから、Quentinが読者にとって最も心理的距離の近い感情移入できる登場人物になっていると言える。ただし、第6章以降はQuentinを相対化する視点としてShreveが導入され、第7章ではQuentinのみならずShreveの内的意識の声が示されることから、作品後半は、読者のQuentinへの共感度の強さに揺らぎが生じることになる。

一方で、*Absalom*の情報調節は、読者とQuentinの距離を大きくする方向にも作用している。Rosa, Mr. Compson, Shreveという情報の限られた登場人物を主たる語り手とすることで、限定的知識しか

持たないcharacter narratorのperspectiveから読者に情報が提供されることになり、彼らよりも多くを知っているQuentinに比べ読者は情報量が少ない立場に立たされる。全物語世界について登場人物達よりも多くを知ることの出来る立場にあるEx narratorも、この方向を強めることに荷担する。Ex narratorには自らのperspectiveから語る場合は読者だけに信頼できる情報を提供できる特別の権利があるが、しかし、*Absalom*においてはQuentinを介さずに読者に情報提供するのは第2章に集中しており、しかもその情報はQuentinの結論を証拠立てるといよりも蓋然性を高めるに過ぎない。むしろ、Ex narratorの視界には限界が設けられ、物語言説の正誤を判断する、本来は自らのものであるはずの語りの権威はQuentinに譲渡されてしまう。最も多くを知っているはずの登場人物Quentinは読者に対して、鍵となる情報を伏せてしまう。

第1次物語世界を設定するEx narratorが潜在化し、第1次物語世界内登場人物Quentinが他の同一水準の登場人物の語りを聞く「聞き手」となる場合、物語構造上の読者とQuentinの距離は小さくなる。その語り手の声⁹がQuentinの知覚のフィルターをとおしてイタリック体で伝えられると、距離は一層小さくなる。さらに、第1次物語世界を枠どるEx narratorのみならず、第2次物語世界を構想するQuentin（とShreve）が語り手としての痕跡を消す場合には、読者とQuentinとの距離は最小値となる。逆にEx narratorが顕在化している時、登場人物としてのQuentinの姿が露わになる。この構造は作品中随所に散見されるが、特に第9章ではこの構造が支配的で距離が大きい状態が続く。第9章ではQuentinの内面を描くイタリック体の部分ですらQuentinは自らが想像する物語世界の登場人物として設定されているが為に距離は大きいままである。

読者とQuentinとの物語構造上の距離の推移を追うと、第5章までは安定的に小さいが、第6章ではその距離が不安定になっており、Quentinを相対化する視点としてのShreveが導入される。Quentinが語り手となる第7章ではその距離は終始大きい。第8章ではQuentinのみならずShreveとの距離が小さくなっており、第1次物語世界、あるいは第2次物語世界の登場人物としてのQuentinの役割が強くなる第9章では距離は大きくなる。

このような語りの技法によって、Faulknerは一方で読者とQuentinとの距離を極限まで縮めながら、他方で距離を広げ、最終的には読者とQuentinを引き離す。この作品はSutpen家の悲劇—HenryによるBon殺害事件—の「真相」を暴こうとしているのではない。Sutpen物語の聞き手であるQuentinに付き合い、根気強く語り手達の言葉に耳を傾けてきた読者は、QuentinがSutpen物語を、そこに登場する人々＝他人にとってではなく、自己にとって意味を持つものへと昇華させる瞬間に立ち会う。Sutpenの世界とQuentinの世界を隔っていた境界が消え去ったこの瞬間を物語として読む特権は、我々読者だけに与えられているのだ。

註

1. 第8章まででイタリック体によって内面が描かれている登場人物として、Quentin以外にShreveを挙げることができるかもしれない。しかしShreveの内面を写すイタリック体は同時にQuentinの内面をも写すという設定になっているので、単独でイタリック体によって内面が描かれる登場人物はQuentinだけだと言えるだろう。
2. 第7章を検討する際に*Absalom*の第1章から第7章までのイタリック体の用法が4つのタイプに分類できることを指摘した（重迫、Ⅶ）タイプ1）Quentinの内的意識の声を写すもの。タイプ2）Quentinが他の登場人物のセリフを想像するもの。タイプ3）他の登場人物の声がQuentinの知覚のフィルターを通して伝えられるもの。タイプ4）単なる声の強調。これにタイプ5）第3章のト書きとしてのEx narratorの声を加えておきたい。第8章で新たに登場した、Quentin＝Shreveの内的意識の声を写すものとQuentin＝Shreveが他の登場人物のセリフを想像するものは、それぞれタイプ1、2の変種と考えることが出来よう。

3. William Faulkner, *Absalom, Absalom!*, (New York: Vintage International, 1990) 以下, *Absalom, Absalom!* からの引用は全てこのテキストにより, 頁数は引用に続けて括弧内に示す。なお, 適宜Modern Library版 (1951)も参照した。テキストの異同に関してはLangfordの研究書を参照した。
4. Langfordによれば, 出版前の草稿ではこのイタリック体による対話は2重の引用符で括られ, 登場人物の直接話法として示されていた。それを現行のイタリック体に変更したという事実はFaulknerがこの部分を登場人物HenryとQuentinのセリフとしてではなくQuentinの知覚のフィルターをとおして再現されたものとして意識的に設定しようとしたことを裏付けている。(358)
5. Langfordによれば, 出版前の草稿ではこのイタリック体は2重の引用符で括られていた。それを現行のイタリック体に変更したという事実はFaulknerがこの部分をSutpenの発声されたセリフではなく内的声を写したものと意識的に設定しようとしたことを裏付けている。(352)
6. Ruppensburgは, Ex narratorが過去の登場人物の内面を描くのは第8章の“*Nor did Henry ever say that he did not remember . . . He remembers all of it*” (283)だけであると断じている(129)。しかし, 実際にはこの部分はEx narratorの語りによるのではなく, QuentinとShreveの共同想像の場面である。なぜこの部分がEx narratorに語られているように見えるのかについては重迫, VIIIを参照。
7. 重迫, VIII
8. 重迫, VIII, 註9参照
9. 例えば, Parker (323-26)はQuentinが秘密を知ったのは, Henryから話を聞いたからではなく, Sutpen屋敷でJim Bondに会ったからだとして解している。確かに, Parkerが指摘するように, 第9章でJimを「見た」瞬間にQuentinはその青年を跡継ぎと呼んでいる(296)し, 第7章のQuentinとShreveの対話(220)でも, QuentinがClytieを「見た」時に秘密がわかったことになっている。Sutpenの娘Clytie, Sutpenの息子Henryの二人の容姿の類似点をJimに見出すことができれば, この仮説は有効であろう。Quentinは実際のSutpenに会ったことがないので, まずはSutpen的特徴をClytieとHenryからつかみ取る必要がある。その特徴がJimにもあれば, 彼をSutpen家の者とQuentinが見ただけで判断するのも納得がいくわけだ。なるほど異母姉に当たるClytieとHenryがSutpenに似ていることは作品中何度も言及されており, 二人の類似点からSutpen的特徴をあぶりだすのは可能かもしれない。しかし, Henry, Clytie, Sutpenの孫EtienneはSutpenに似ているという記述(56,109,164)がある一方で, Sutpenの曾孫にあたる肝心のJimは父Etienneと似ておらず母親似であり(174), Sutpen的性質がない(297)登場人物として描かれているのである。また, 草稿段階では“*It's Jim Bond. . . It's the heir to the house. . .*”と, QuentinがJimをはっきりと“*the heir*”と確信しそう呼んでいる部分を, FaulknerはModern Library版では“*The scion, the heir, the apparent (though not obvious)*”とし, Quentinが断言するのを避けるように設定しており, このことから外見だけからはJimがSutpenの血縁だと断定できないことを, Faulkner自身が意識的に強調しようとしたと考えられる(Langford, 356)。むしろ, 私はここで, JimがSutpen的でない者として描かれている事実を強調しておきたい。そのように解釈しなければ, Sutpenに全く似ていない長子達(BonとJim)が周期的に生まれてきて, Sutpen家崩壊に深く関わっていくという非常に興味深い事態を見失ってしまうからだ。
- 10 読者の側のこの失望といらだちは, 果たしてどのようにしてQuentinがBonの素性を知り得たのかという議論がこれまでに展開されてきた原因となっている。Cleanth Brooksは, HenryがQuentinに何か言ったはずであり, ここに書かれているのはHenryとQuentinのやりとりの全てではないだろうと考えるが, 結局そう考える根拠がないことを認めているのは, “I believe that he [Quentin] learned the secret from Henry's own lips. . .” (“*Toward*, 322)と述べて“believe”という動詞を使わざるを得なかった点に明らかである。Peter Brooksもまた, この場面が読者に与える当惑について言及している(306)。

参考文献

- Brooks, Cleanth. *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country*. Baton Rouge: Louisiana State U P, 1963, 1990.
- _____. *William Faulkner: Toward Yoknapatawpha and Beyond*. Baton Rouge: Louisiana State U P, 1978, 1990.
- Brooks, Peter. *Reading for the Plot: Design and Intention in Narrative*. Cambridge: Harvard U P, 1984.
- Faulkner, William. *Absalom, Absalom!*. New York: Vintage International, 1990.
- _____. *Absalom, Absalom!*. New York: Modern Library, 1951.
- Genette, Gerard. "Discourse de recit, essai de method." *Figures III*. 1972 (花輪光・和泉涼一訳『物語のディスクール：方法論の試み』水声社, 1983) .
- _____. *Nouveau discours de recit*, 1983, (和泉涼一・神郡悦子訳『物語の詩学：続・物語のディスクール』書肆風の薔薇, 1985) .
- Kuyk, Dirk, Jr. *Sutpen's Design: Interpreting Faulkner's Absalom, Absalom!*. Charlottesville: UP of Virginia, 1990.
- Langford, Gerald. *Faulkner's Revision of Absalom, Absalom!: A Collation of the Manuscript and the Published Book*. Austin: U of Texas P, 1971.
- Parker, Harshel. "What Quentin saw 'Out There,'" *Mississippi Quarterly* 27, 1974: 323-26.
- Polk, Noel. *Children of the Dark House: Text and Context in Faulkner*. Jackson: UP of Mississippi, 1996.
- Rimmon-Kenan, Shlomith. *A Glance beyond Doubt: Narration, Representation, Subjectivity*. Columbia: Ohio State UP. 1996.
- Ruppersburg, Hugh M. *Voice and Eye in Faulkner's Fiction*, Athens: U of Georgia P, 1983.
- 重迫 和美 "Absalom, Absalom!におけるFaulknerの語りの技法Ⅰ"『比治山大学現代文化学部紀要第2号』1995.
- _____. "Absalom, Absalom!におけるFaulknerの語りの技法Ⅱ"『比治山大学現代文化学部紀要第3号』1996.
- _____. "Absalom, Absalom!におけるFaulknerの語りの技法Ⅲ"『比治山大学現代文化学部紀要第4号』1997.
- _____. "Absalom, Absalom!におけるFaulknerの語りの技法Ⅳ"『比治山大学現代文化学部紀要第5号』1998.
- _____. "Absalom, Absalom!におけるFaulknerの語りの技法Ⅴ"『比治山大学現代文化学部紀要第6号』1999.
- _____. "Absalom, Absalom!におけるFaulknerの語りの技法Ⅵ"『比治山大学現代文化学部紀要第7号』2000.
- _____. "Absalom, Absalom!におけるFaulknerの語りの技法Ⅶ"『比治山大学現代文化学部紀要第8号』2001.
- _____. "『アブサロム, アブサロム!』におけるフォークナーの語りの技法—映画の物語構造との比較"『フォークナー』第1号, 1999.

key words: 1. William Faulkner. 2. Absalom, Absalom!. 3. Narrative Technique. 4. Voice.
5. Perspective.5. Perspective.

重迫 和美 (言語文化学科英語文化専攻)
(2003. 10. 31 受理)